



国際医療福祉大学病院
~連携通信~
第16号

那須塩原市 渡辺美知太郎市長へインタビュー

~子どもから高齢者まで健康で元気に暮らせるまちをめざして~

わが国では、急速な「少子高齢化」や「2025年問題」、さらには2038年に向けて急増する「多死の時代」など、われわれの将来を左右する大きな社会問題が進行しています。厚生労働省は、高齢者が自立した尊厳ある人生をおくることができるようにと地域の特性に合わせた地域包括ケアシステムの確立を目指していますが、その取り組みはまだ始まったばかりです。今回は那須塩原市の医療福祉行政の特徴や将来構想の取り組みなどについて、那須塩原市 市長 渡辺 美知太郎様にお話を伺いました。



(C) みるひい
那須塩原市

那須塩原市医療福祉行政の特徴・将来構想について、また、地域包括ケアシステム実現に向けての市の取り組みについてお聞かせください。



那須塩原市 市長
渡辺 美知太郎 様

広い話からさせていただきますと栃木県北地区はリトリートメントといいますが、現代医療は今まで身体に関するケアというのは進んでいるのですが、今後、メンタルをどのようにケアをしていくかが大きな問題になってくると思うのです。これだけテクノロジーが進歩してくると、いい意味ではテレワークなど、いくらでもどこにいても仕事ができるようになってくるのですが、デジタルデトックスという言葉がある通り、逆に言うと携帯で365日24時間拘束されてしまい、便利になったがゆえの反動というのがあると思います。そうしますと、今後はいかにストレスをマネジメントしていくかと言う議論になっていくと思うのですが、栃木県北には温泉もあり、東京にも比較的近いアクセスの良い地域です。いかにストレスをリトリートしていくか、デジタルデトックスをして、場合によってはテレワークが拘束の一つと言いましたが、逆に言いますと東京に行かなくても仕事ができるわけですので、例えば、駅前に住んでいただいて、温泉に入りながら暮らしていただき、リトリートとしての機能を今後打ち出せていけるのではないかと考えております。次に現実的な面を言いますと、那須塩原市の健康寿命は男性79歳、女性84歳で栃木県内では比較的良好な方なのですが、まだまだ課題はあると思っています。例えば、バランスの良い食事が若い方だととれていないこと、車社会なので若い世代で運動習慣がある人が少ないこと、また、働き盛りの方にメタボ率が高く生活習慣病予備軍がいるのでいろいろな場面で予防事業など対策を講じております。



地域医療連携室 月曜日～土曜日 9:00～17:30

医療相談室 月曜日～土曜日 9:00～17:30

休診日・夜間等の救急紹介の場合は、0287-37-2221 (代表) から 担当医師に取り次ぎます。

地域医療連携室ホームページ URL : <http://hospital.iuhw.ac.jp/cooperation/index.html>

①母子・成人保健

母子保健につきましては、保健センターを子育て世代包括支援センターと位置づけまして、妊娠期から出産、子育てまで切れ目のない支援を実施しているところです。成人保健では、各種がん検診及び特定健康診断等を実施しています。がん検診の受診率は、県内で比較しましても高い方であります。生活習慣病の課題があると思います。かかりつけ医の普及啓発については、日頃から様々な事を相談できる「かかりつけ医」を持つように周知し、まずは日常的な診察や健康管理等を行ってくれる身近なお医者さんへの受診を勧めていきたいと考えております。



副院長 柴信行医師よりインタビュー

②那須塩原市発達支援システム

那須塩原市発達支援システムにつきましては、国際医療福祉リハビリテーションセンター・センター長の下泉先生、金子忍言語聴覚士、国際医療福祉大学病院小児科部長の門田先生には発達支援の指導助言や発達支援体制協議会にご参加いただいておりますが、発達に支援の必要な子ども（生まれてから20歳まで）とその保護者に対し、早期から適切な支援が受けられるよう関係機関と連携し環境を整え切れ目のない支援をしていかなくてはならない。このシステムを導入して今、中学3年生がいますので、いよいよ就労という新しい段階に彼らが入っていきます。育児から就学、そして就労と新しい局面を迎えるにあたって、引き続き切れ目のない支援をしていきたいと思っております。発達支援の必要な子どもが健やかに育ち、将来的に本市で社会参加や自立につながるよう、今後とも子どもを支える医療と行政の両輪として国際医療福祉大学病院と綿密な連携を図ってまいりたいと考えております。

③医療介護連携

高齢者施策として、高齢者が重い要介護状態になっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けられるよう、在宅医療と介護一体的な提供に向けて関係者の連携が必要です。平成30年6月那須在宅医療圏を構成する3市町と共同で「那須地区在宅・医療・介護連携支援センター」を設置し、在宅療養コーディネーター2名を配置して運営しています。事業としては、医療介護の連携に関する相談や講演会、関係者の連携を推進するための顔が見える関係づくりに向け、入退院支援に関するざっくばらんな懇談会などを開催しています。また、市においても、多職種連携会議を開催し、医療・介護関係者の垣根を越えた風通しの良い関係を築いています。

④福祉全般【地域共生社会】

かつて昭和のころは、隣近所の顔の見える関係があったと思います。しかし、平成、令和と時代が変わる中で隣近所の関係性も薄れてきてしまい、疎遠になってきています。そこで、那須塩原市では、市民ひとり一人の支え合いの力によって地域で支え合い、共助、自助、公助の部分を、サポートしなくてはならないと思っております。

⑤地域包括ケアシステム実現に向けて市の取り組みについて



私の公約の一つに、子どもからお年寄りまで安心し暮らせるよう、ライフステージに併せた医療・福祉・介護を提供できる「人創り」を掲げています。高齢福祉策では高齢者が重い要介護状態になっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けられるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供できる仕組み、いわゆる「地域包括ケアシステム」の構築を目指しています。非常に限られた医療資源を今後どのように効果的に活用するか、医療や介護・福祉といった専門職だけではなく、市民ひとり一人が医療・介護・福祉、生活支援や介護予防の担い手として活動できるようなステージを用意しなくてはと思っています。「地域包括ケアシステム」の構築に向けた本市の今後の取り組みについて、進捗を含め、重点事業を中心に申し上げます。

一つ目は、何と言っても大きなことは総合事業（介護予防・日常生活支援総合事業）です。介護予防・生活支援サービス事業と一般介護予防事業があり、地域住民を含めた様々な主体が高齢者の多様なニーズに応えられるよう、サービスを提供することが求められています。介護予防・生活支援サービス事業では、要支援1・2の方や基本チェックリストにより生活機能低下がみられた方の介護予防と自立した日常生活の支援を行うため、身体介護（入浴等の介助）や生活支援（清掃などの支援）を提供する訪問型サービス、デイサービスセンターで体操やレクリエーション等の機能訓練を提供する通所型サービスを実施しております。今後は、住民主体による生活支援サービス（ごみ出し等の日常生活支援等）を提供できる体制づくりを進めていきます。一般介護予防事業では、地域ぐるみで介護予防を行うため、いきいき百歳体操による通いの場づくりの支援をおこなっています。

二つ目、地域住民助け合い事業です。少子高齢化や核家族により独り暮らしの高齢者や高齢者だけの世帯が増えていくなか、元気な高齢者を含め、地域住民の医療・福祉・介護事業所、店舗などの地域関係者が一体となって見守る地域づくりを進めていくことが求められています。

15の公立公民館区に配置した地域支え合い推進員15名が中心となり、自治会やご近所、ボランティアの方と共に見守り活動を実施しています。地域包括ケアシステムを構築するには、元気な高齢者から要支援・要介護の認定を受けた方まで、ライフステージに合わせた「介護予防と生活支援」「在宅医療と介護の一体的な提供」が必要です。そのためには、医療・福祉・介護の関係者、なによりも、一人でも多くの、地域住民がサービスの担い手としてご協力いただけるよう、「人創り」を念頭に各種事業を進めていきます。



(C) みるひい
那須塩原市

国際医療福祉大学病院では2020年度より成田キャンパス 医学生の実習受入を予定しています。那須塩原市が当病院に期待していることはどのような事でしょうか。

国際医療福祉大学病院は、市にとって医療・介護・福祉の中核的病院として、地域の核となっていたいだきたいと思ひますし、知識の知の集積としても頼りにしております。例えば何かあったときに直ぐに相談できること、最寄りに知識をお持ちの先生方がいらっしゃるの心強いです。それからこれは医療の事ではないですが、東京から那須塩原駅までは160kmしか離れていないが、東京都に比べると格差がある、これは情報の格差だと思ひています。今後、那須塩原駅前の活性化ができるよう考えています。学生さんとはいえポテンシャルの高い方々が人間力を磨いていただき、那須塩原市に若い医学生の方々の生活の拠点を置き、地元の方々との交流を図っていただくことで、本市の発展に寄与して頂けると大いに期待しております。市も地域ぐるみでお付き合いできるような取り組みをさせていただければと考えております。

渡辺市長の休日の過ごし方やストレス解消法などについて教えてください。

疲れたときには早めに仕事を切り上げて温泉に入ったり、地元のうまいものを食べたりしています。前職時代にお世話になった方に、「激務ですが、週3、4日温泉に入って那須高原野菜を食べている。」と伝えると皆さん羨ましがります。温泉に入っのんびりすることが最大のストレス解消法です。働き方改革と言われている時代、意識的に休みを取り、映画鑑賞や小説などを読んで人間としての厚みがでるような自分の時間を作っています。

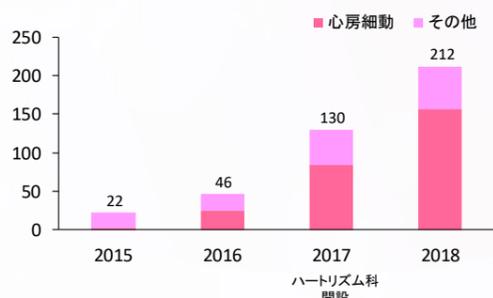


不整脈センター開設のお知らせ

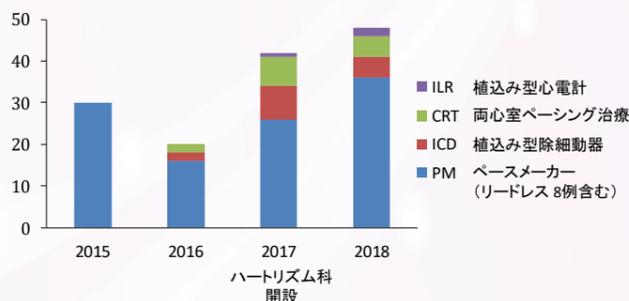
不整脈センター開設の経緯

2019年4月から国際医療福祉大学病院に不整脈センターが開設されました。今回のセンター開設に先立ち、2017年4月に当院では不整脈治療を専門とするハートリズム科が開設され、皆様からのご支援のおかげで順調に実績を伸ばして参りました。2018年には栃木県北唯一の不整脈専門医研修認定施設として登録され、あらゆる不整脈疾患の診療・治療を行える状況が整いました。これから栃木県北地域における最先端の不整脈診療の実施を目指し、新たに不整脈センターが開設されました。

カテーテルアブレーション治療の推移



植込み型治療機器の推移



センターの特色

頻脈性不整脈に対する高周波カテーテルアブレーション治療を中心に、徐脈性不整脈に対するペースメーカー治療から致死的不整脈に対する植込み型除細動器の植え込み、重症心不全症例に対する心臓再同期療法、ブルガダ症候群を含めた特発性心室細動の診断・治療など、多岐にわたるあらゆる不整脈疾患に対応し、高度先端治療を展開しています

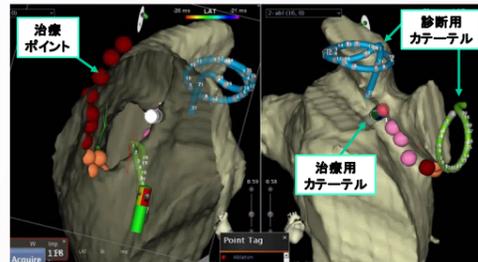
治療法の紹介

経皮的な心筋焼灼術（カテーテルアブレーション）

カテーテルをもちい心臓内の不整脈の原因となる部位を焼灼することで、異常な電気信号の流れを遮断します。当院では最新の3次元マッピングシステムを導入しており、心房細動から器質的疾患にともなう複雑な回路をもつ心室頻拍まであらゆる頻脈性不整脈の治療を行い、良好な成績を収めています。

対象疾患	診断法
頻拍性不整脈	・長時間(24時間)ホルター心電図
・期外収縮	・運動負荷心電図
・心房細動/心房粗動	・加算平均心電図
・発作性上室性頻拍	・電気生理学的検査
・WPW症候群	
・心室頻拍	治療法
・心室細動	・不整脈薬物治療
・QT延長症候群	・カテーテルアブレーション
・ブルガダ症候群	・植込み型ペースメーカー(リードレス含)
徐脈性不整脈	・植込み型除細動器(ICD)
・洞不全症候群	・心臓再同期療法(CRT)
・房室ブロック	あらゆる不整脈疾患に対応します

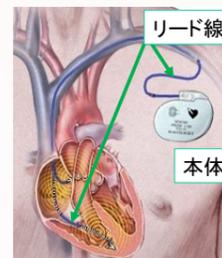
3次元マッピングシステムを用いた心房細動カテーテルアブレーション



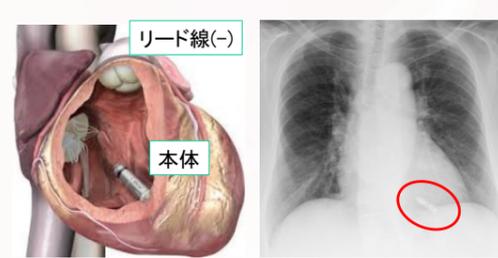
ペースメーカー治療

徐脈性不整脈に対する従来のペースメーカー治療に加え、2017年からはカプセル型の本体に電気回路や電池、電極などの全てを組み込まれているリードレスペースメーカーが臨床応用されています。従来の経静脈型ペースメーカー治療における静脈内のリードの合併症および体表(前胸部)にある本体による日常生活の制限が解消されます。当院でも積極的に適応を検討し(現在は心室のみのペーシングのみ)、植え込みを行っております。

経静脈型ペースメーカー



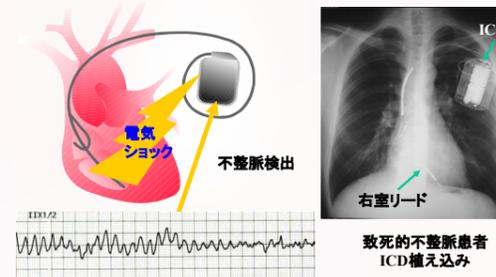
リードレスペースメーカー



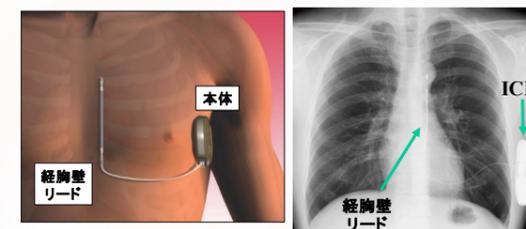
植込み型除細動器治療

植込み型除細動器(ICD)は、突然死につながる致死的不整脈を自動的に検出し、電気ショックを心臓に放出し、不整脈を停止させる機器です。2016年からは心臓内にリード線を留置しない皮下植込み型除細動器(S-ICD)が臨床使用開始されております。従来の経静脈型と比し、血管・心臓内にリード線を留置しないことにより、リード断線、重篤な感染症、血管内閉塞のリスクが回避可能となっております。ただし心臓内にリード線がないため、脈が遅い不整脈に対するペーシング機能はなく、病態に応じて両タイプを選択する必要があります。

経静脈型ICD



皮下植込み型除細動器(S-ICD)



最後に

国際医療福祉大学病院に開設されました不整脈センターには、現在5人のスタッフが所属し、日夜不整脈診療に励んでおります。今後、不整脈治療用カテ室の更新も控えており、あらゆる疾患に迅速に対応していきます。お困りの症例、悩ましい症例などいつでもお気軽にご相談ください。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます

IUHW Clinical Observership Program: ヴロツワフ医科大学臨床実習受入れ

当院では2020年から医学部4年生の臨床実習の受け入れを予定していますが、臨床実習プログラムの一環として海外有名大学と提携して実習生相互受入れを開始しています。今年度は、2019年8月5日から12日間、ポーランドのヴロツワフ医科大学の3名の4~5年次の医学生を受入れ、当院で臨床実習を行いました。ヴロツワフ医科大学は、1811年開設と医学教育には長い歴史を持ち、アルツハイマー、コッホ、エーリッヒなど著名な医師が在籍したことで有名です。学生は、午前・午後に分けて、主要臨床科の見学を主体とした実習プログラムで学習するだけでなく、ビールパーティ、日光観光など国際交流を深めるためのイベントにも積極的に参加してくれました。最終日には各自30分のWrap Up Presentationを行いました。日本とポーランドの医療の比較や、先進的な医療への質問など活発な議論が行われました。(文責 柴)

